

はしがき

セルフ・ネグレクトは、自分自身の健康と安全を自ら放任・放置する行為であり、社会サービスや治療の拒否・放棄のみならず、責任を果たせない多頭飼育や不用品の収集からゴミ屋敷の状態にまで至る場合もある。加えて、その状態が続くと誰にも看とられずに自宅で死亡するといった孤立死に至るリスクが非常に高まる。セルフ・ネグレクトは健康や安全面だけでなく、死とQOLの点で危機的状況にあることが明らかであるにもかかわらず、支援や人との接触を拒みがちな人間の複雑な問題であり、すぐそこにいる人に対して社会からのアプローチが簡単には届かない疎外の問題でもある。

それゆえ、セルフ・ネグレクトは支援する側に対応困難事例として捉えられる傾向があり、イギリスとアメリカでは既に深刻な社会問題となってきた。そして日本と韓国においても、近年独居高齢者を中心にセルフ・ネグレクト事例が急増し続けている。このような状況のなかで、セルフ・ネグレクトに対する予防策と効果的な介入方法の模索が求められているが、そのためには、まず高齢者がどのようなプロセスを経てセルフ・ネグレクトに陥ったか、そのメカニズムを明らかにしなければならない。

従来のセルフ・ネグレクト研究では医学・看護学分野を中心に研究が蓄積されてきた一方、社会学・社会福祉学の分野では研究がほとんどなされていない。そのため、先行研究においては、個人レベルの要因には着目されているものの、あらゆる障害および認知機能的に困難を抱える高齢者を対象とした調査が多くを占めており、その結果、意図的あるいは非意図的にセルフ・ネグレクト状態に陥った高齢者は調査の対象から除外されている。しかもその原因を解明する際には、当事者の視点ではなく研究者による診断および見立てが主な判断基準とみなされているのが現状であった。日本の場合も、セルフ・ネグレクトに至るプロセスに関する研究はもちろん、当事者の視点に着目した学術研究は見当たらない。

しかし、セルフ・ネグレクト状態にある当事者にはどのような思いと経緯が、そして社会との関連性があるものであろうか。それを知ることは、どのように高齢者がセルフ・ネグレクト状態に陥ったかを知り、この問題のメカニズムの解明に迫ることにつながる。セルフ・ネグレクトのメカニズムが明らかになれば、どの時点でどのように介入すればよいか具体化できると考えられる。なお、セルフ・ネグレクト高齢者には「支援拒否」、「支援を求めない」、「治療の拒否・放置」といった特徴がある一方で、彼ら自身にセルフ・ネグレクト状態の認識があるのか、そして回復するための意志と支援ニーズをもつか否かをより正しく理解するためにも、セルフ・ネグレクト状態にある当事者の思いと心情を詳細に検討することが肝要である。

本書では、高齢者が社会的存在として希望と尊厳を保持しながら安全・安心に暮らせる地域社会の実現を目指し、日本のセルフ・ネグレクトへの予防・支援モデルの構築に資する基礎的知見を得ることを目的とした。具体的には、国内外の文献を総合的かつ系統的に検討したうえで、当事者の視点に立脚し、セルフ・ネグレクトの発生要因のみならず、普通に暮らしている人がセルフ・ネグレクトになるプロセスのメカニズムを解明すること、またセルフ・ネグレクト状態にある高齢者の支援ニーズを明らかにすることを目指した。

最後に、本書がセルフ・ネグレクトの潜在的リスクを有する高齢者の早期発見・早期介入に活用できる基礎的な資料として、セルフ・ネグレクト高齢者の支援にとどまらず、高齢者を取り巻く社会問題（社会的孤立・ひきこもり・物屋敷など）への予防に少しでも役立てば幸いである。

2020(令和2)年1月

鄭 熙聖